実践事例Ⅲ

遊びの目的を友達と共有し、創り出す姿を願って

－子どもと保育を紡ぎ合いながら－

岐阜県 岐阜市立岐阜東幼稚園
教頭 宮内 峰子

●はじめに

本園では、子どもと保育者が心ときめく瞬間を大切にしながらその援助や環境の在り方について、研究を進めている。「わぁ面白そう」「なぜだろう？」と心が動きときめくことから主体的な遊びが始まり、思考力、探究心が膨らんでいく。様々な体験を繰り返す中で、互いの考えを伝え合ったり、協力したり、時には、思いや考えが異なり葛藤したりする。保育者の援助を受けながら、共通の目的に向かって遊びを創り出していく営みを大切にしている。

●事例1●遊びの目的を仲間と共有する　五歳児　十一月上旬

秋の自然物や毛糸などを使って様々なスイーツができあがる。A児たちは「ケーキ屋さんをしよう」と準備を始める。一学期にお化け迷路屋を行った経験から、レジ、お金、看板など必要な物に気付き、必要な材料を選んで作る。

翌日も開店の準備を進めている。保育者は、友達とイメージが共通になるように広告紙やカタログを用意する。それを見たA児が「ケーキを置くところってどうする？」と言う。B児は「棚に置いて飾ろうか」と言い、C児も「たくさん置けるといいよね」と言う。保育者が「お客さんに見てもらえるようにするということ？」と尋ねる。A児は「そうそう、透明のところがあって、そこからこうやって出して渡すっていうのはどうかな？」と言う。B児とC児が首をかしげているので、保育者は「絵に描いてみたらどうかな？」と提案すると、A児は紙とペンを持ってきて描き始める。

子どもたちは主体的にケーキ屋さんごっこに取り組み、何が必要かを考え合っている。保育者はこうした姿を大切にしたいと考え、イメージが共通になるための援助を行った。また自分たちで進められるように環境を整えておくことで、子どもたちで遊びを創り出していった。

●事例2●互いに思いや考えを伝え合う　五歳児　十一月中旬

「ガラスの中にきれいにケーキが並んでるよね」「そうそう、お店の人がこうやって取ってくれる」ケーキ店に行ったときの様子を伝え合い、それをA児が描いて設計図ができあがる。B児が「この前、木で家を作ったよね。棚も木で作ったら丈夫になるんじゃないかな」と言う。「木だったら色もかわいく塗れるよね」「花とか描いてかわいくしよう」と相談する。園務員のD先生の部屋に行き設計図を見せると、D先生はいくつか木片を出し「大きくて重いから、みんなで力と気持ちを合わせないと難しいよ」と言う。「任せといて。頑張るわ」と子どもたち。「これをまず運ぼう」「E先生、外のプールの所でやっていいよね？」とみんなで木片を運ぶ。A児「くぎを打つから、そっちを持っていてく

れる?」B児「いいよ」A児「順番で打つといいよね。次、誰がやりたい?」と声を掛け合いくぎを打つ。数日間かけて棚を作りあげるが立てると、ガタガタ音がして傾いている。「なんで斜めなのかな」「これだと棚の上にのせたケーキが滑っちゃうよ」A児が「みんな、真っすぐにしてみよう」と言い四人で角を持ってみる。C児が「ここだよ。ここが何だかおかしいよ」と足の一つが短いことに気付く。B児が小さな木片を持ってきて床と足の間に置くが合わない。今度はA児が別の木片を「これはどうかな」と置くと足の高さがそろう。子どもたちは「よかった」「やったね」と喜び合う。

五歳児になると本物らしくしたい、よりよいものにしたいという思いが高まってくる。目当てに向かってこれまでの経験を生かしたり、試行錯誤したりできるように、保育者は木片を近くに置いたり教職員間で連携し準備を行ったりした。また経験の積み重ねにより友達と創り出すごっこ遊びの面白さが分かって、うまくいかないことがあっても諦めない粘り強さの原動力になっていると考える。

●事例3●互いを理解し、認め合う

五歳児　十一月下旬

子どもたちはできあがった棚にケーキを置く。「かわいいね」「お店屋さんを始めよう」とレジを置いたり皿を用意したりするなど開店準備をし、学級の子どもたちが買いに来る。

A児はこの日欠席し、翌日登園してもなかなか遊び出さない。B児や保育者が「一緒にやろう」と誘ったが「今日はやらない」と言う。浮かない表情のA児のことがみんな気になり集まって話し合う。B児「ケーキ屋さんが始まってたから入りにくかったんじゃないかな」F児「Bちゃんが誘ってくれてうれしかったと思うよ。私たちは昨日やったから、今日はAちゃんのやりたい役を聞いてみようよ」C児「Aちゃん、絵が上手だから、小さい組に渡すチケット作りを、一緒にやるっていうのはどうかな?」みんなC児の意見に賛成し、C児がA児に伝えに行く。A児は表情が和らぐ。みんなのそばに来ると「Aちゃん、待っとったよ」と迎えられ、ほっとしたように一緒にチケットを作り始める。

保育者は、子どもたちが仲間であるA児を気に掛け、思いを知ろうとしていることをうれしく感じた。一緒に試行錯誤してごっこ遊びを創ってきた仲間だからこそ思いやっていた。五歳児のこの時期、互いを認め理解し合うためには、どれだけ友達のことを知っていて、分かろうとしているのかが大切になってくる。そのためには、関わってきた時間、物事に一緒に取り組んだ経験が必要になる。その過程で互いのことを知ろうとする気持ちが膨らんでいき、認め合う姿へとつながっていく。

●おわりに

ごっこ遊びは様々な要素が絡み合っていて、保育者が多面的に柔軟に遊びを見て援助していくことが必要になる。五歳児は、十分に試行錯誤し、仲間と困難があっても支え合ってこそ、ごっこ遊びの充実感や達成感が味わえる。子どもたちは、人やものや時間や場と関わり、思いやり、認め合い、考え、悩み、気付き、共感し、遊びを創り出していった。

保育者自身も主体となって子どもと保育を紡ぎ合っていきたい。ごっこ遊びの面白さを仲間となって味わったり、子どもに任せたり、子どもの思いに寄り添ったりし、試行錯誤して援助していきたい。